301033	台湾学生の追吊文詩	394	明29.3.25	内外雑纂

●臺灣學生の追吊文詩

去七日谷中天王寺に於て、臺灣總督府學務部員故桂金太郎氏の葬儀を營むや、臺灣學生葉壽松、張柏堂二氏は、左記の祭文及詩を柩前に朗誦し、會葬者には、伊澤學務部長、同部員一同、番町小學校教員、生徒、其他桂氏の知己朋友等にて、中々の盛會なりしと云ふ。今其祭文及詩と、之に添へたる書簡とを仝部員橋本武氏より得たれば、左に掲ぐ。

昨接瑤函云要前日祭桂先生詩文及序欲登諸新聞社晚生恐粗劣之文猶倉皇客路實貽笑大方也生思亦表愚誠之一端故敢拜呈耳所可幸者此番渡來帝國得以廣其見聞者皆荷蒙伊澤大人栽培之至亦我中島先生教誨之功所以今日得蒙角田大人及諸大人照應而來不勝欣喜但生未曾遠遊故每頓生鄉思之念自慚粗鄙無文不才實甚伏望仁翁恕罪所有事情勿吝賜教是幸即付生前日所作謹呈

橋本武先生大人閣下

明治二十九年三月十五日

學務部生葉壽松
張柏堂頓首拜

吊桂金太郎先生之靈並序

明治二十九年、一月一日八時、欲往總督府拜賀新禧、行至千有餘步、時値土匪蜂起、乃與諸公同歸學堂、修整文書、再向臺北、回未久時、匪類紛紛、到於芝山巖山下、將進學堂、公奮然而戰、追無數凶徒、但寡難敵衆遂死於無良之手、公姓桂名金太郎也、氣宇不凡、有磊落不羣之概、余自客年考試應選入學以來、公不嫌固陋之質、少有閑暇、諸子百家之書、欲共參稽、而應酬諸事、幾蒙指教、凡動作周旋、輒命余作詩、至去年十一月間、公云有友人來信、見考試之論、不勝感慕、遂命余生平所作拙稿、毋論詩賦文章、彙成一冊、余辭以豈敢、而公曰無妨、何拙稿搜未齊整、而忽得公等之訃、不禁墮淚沾襟、殘患成疾、迨微軀稍安、未嘗不嘆厚恩未報、遂至於此也、然猶得三月二日、渡來帝國、聞公遺族三月七日欲葬於谷中墓地、生葉壽松追憶惠顧之至、故不揣愚昧、因與張柏堂君謀作祭文一節、律詩一則以弔之曰、

維明治二十九年三月七日　臺灣學務部學生葉壽松
張柏堂哀泣於

桂金太郎先生之靈前曰、嗚呼先生之爲人兮、品正端方、施教不倦、理道無窮、堂皇正大、器宇寬冲、德澤所被、名教有功、方期壽考耆耋、享無疆之福祿、豈料哲人遭變、寸心如誠石、一死表孤忠、至今徒覓生遺跡、憑悲淚莫在眼中、嗟嗟、音容杳矣聲氣莫通、俾予小子、疑莫予解、過莫予攻、魂兮有知、應亦心恫、碧靈貫日月、浩氣追太空、忠魂萬古誠宛在、毅魂千秋漢瀛東、嗚呼哀哉、鑒我微衷、

丹心許國自身忘　坊表千秋俎豆香
志節平生原不吝　聲名沒後實堪長
由來蟻術推妙選　話到鴻恩轉凄涼
杳矣音容如尙在　憂思那禁淚成行

又絶句一則

一點忠魂應在天　濟濟多士奠靈前
音容恍惚猶堪憶　義士由來紀萬年

明治二十九年三月七日　臺灣學務部生葉壽松
張柏堂仝具

301034	台湾行の教育家を餞す	395	明29.4.5	時事寓感
301035	時事新報の台湾教育論	396	明29.4.15	時事寓感

●臺灣行の教育家を餞す

臺灣學務部員、及日本語傳習所講習員諸氏は、一昨日を以て、臺灣に赴けり。想ふに、諸氏の任たる、教化を以て臺地を開拓するに在り。皇化をして其地に遍からしめ、土人をして皇威に懐かしむると否とは、一に諸氏の献身的精神の盛衰如何に存す。諸氏亦努めずんばあるべからず。

抑臺灣教育の事たる、既に昨年來其緒に就き、學務部員相率ゐて渡臺し、學堂を設けて子弟を教育し、其効果大に期すべきものありしに、今歳元旦、偶土匪の蜂起に遭ひ、諸氏枕を並べて毒刃の下に斃る、然れども、諸氏が既に蒔きたる種子は、全く枯槁したるにあらず。或は幼芽を萠出し、次第に成長せんとするものあり。今回渡臺せんとする教育家諸氏は、殉難教育家の後繼者として、職に教督に從はんとす。其殉難教育家の幽魂をして地下に安んぜしむると否とは、一に諸氏が今後の覺悟如何に存すと謂はざる可からず。

嗚呼臺灣教育家諸氏よ、諸子宜しく熱誠以て臺地教化の職に從ひ、以て献身報國の大義を竭さんことを期せよ。若し或は諸氏にして再び土匪の難に斃れ、瘴癘の患に罹からんか、諸氏の事業を繼ぎて起つもの、相列びて諸氏の後に在り。亦何の顧慮する所かあらん、吾等は、諸氏が健全なる身體と、剛壯なる精神とを以て、教育の任に從ひ、以て新版圖萬世の基礎を樹立せんことを望む。

●時事新報の臺灣教育論

先月末日の時事新報社説には、臺灣教育論一篇を掲げたり。其大意にいふ、「八芝蘭の學校にて土人を教へける時、彼等は我儘勝手のことのみ言ひ、剰さへ匪徒の中には、彼等の父兄も雜り居たりとのことなれば、彼等の容易に文を以て化し難きを知るに足るべし。然るに當局者の間には、最初より日本流の教育を強ふるは、困難なれば、暫く彼等の舊慣に從ひ、先づ四書五經等の譯讀より始めんとの説ありと聞く。これ何たる事ぞや。元來彼等は、儒教の民とて、自ら中華と稱し、他を夷狄野蠻と信ぜるに、今其學校の教育に、聖人の教を本とせば、彼等の頑迷心を增長せしめて、いよ〳〵制し難きに至るは自然の成行なり。これもとより、言語を授くるの階梯と爲すに過ぎざる積りなるべけれど、不可なり。此際彼等をして一點倨傲の心を起さしむる時は、必ず後患を遺すに至るべし。本來を言へば、彼地叛亂僅に鎮定し、人心の向背未だ判然せざる時なれば、此際の處置は、威壓主義を專一とし、教育の如き、姑らく他日に期するこそ相當の循序と思へど、是亦彼等を風化する手段なりとすれば、斷然其主義を一定し、其主義に從へる教育を受けざる時は、實際に差支あるの必要を感せしむべし。恰も此方より御機嫌を取りて、彼の頑迷心を增長せしむるが如きは、斷じて取らざる所なり」と。此趣意を摘記すれば、第一、教育は威壓の後に施行すべき者にて、寧ろ第二位に置くべし、第二、若し教育を必要とせば、何處までも新主義に依りて、斷然之を施行すべしとの二個條に歸すべし。第一に關しては、木下廣次氏も嘗て記者に語りて、歐洲諸國が他國を占領せし手段を見るに、皆其占領以前、會社を立てゝ暗に經濟上の利を占むるとか、何とかの方略を運らし、